

Rosa Plumula

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレターNo.26

目次

巻頭言

教養科目で何を得的	2
キャンパス情報	
ー各学部からー	2
Voice	
ー教養科目を面白く聴く工夫ー	5
聞いて欲しい私の意見	
ーこんな教養科目があったならー	7
教養教育古今東西	9
掲示板コーナー	10
つぶやき	10

(平成15年4月発行)

巻頭言

学長 宮田 武雄

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

これから数年間の学生時代を、皆さんはどのように過ごそうと考えているでしょうか。おそらく十人十色の考え方があるでしょう。自分の人生の一時代ですから、自分で納得できるように過ごすのが良いと思いますが、私自身の学生時代とその後の人生を振り返ってみますと、学生時代は人生における他のどの時代とも異質であり、なおかつその後の人生に極めて大きい影響力を持っているように思います。

学生時代だからこそ出来ることもあるでしょうし、学生時代にこそしておくべきこともあるでしょう。今この時点で将来を見渡してみてください。社会は変化します。しかも変化の速度はますます速く、変化の形はますます多様化しています。それ故に、皆さんにはとても広い可能性があるのです。多くのことを学び、深く考察し、様々な体験の中から、将来の社会と自分との関係を設計図に描きましょう。そして、その設計図を具現化するための底力を、学生時代に蓄えてください。自分がしたいことと社会が求めることの整合する領域を見出し、その中に自分が得意なことを確立するために、決して長くはない学生時代という貴重な時間を大切にしていきたいのです。

人生は感動の連続でありたい、生きていることの実感が欲しい、と思います。そして、生涯を通してそのことがどれ程多く体感出来るかは、知性も感性も鋭い学生時代の過ごし方に依存しているのではないかと感じています。皆さんの学生時代が、将来の豊かな人生の源泉となることを心から祈ります。

健康と安全にくれぐれも留意して、悔いのない学生時代を過ごしてください。

教養科目で何を得的

大学教育研究開発センター

センター長 曾我日出夫

新入生のみなさん御入学おめでとうございます。

新しいことを始めるときの何かワクワクしたような気持ちをしている人が多いのではないのでしょうか。大学では何が得られるのでしょうか。実は、私も35年ほど前ワクワクした気持ちで大学に入学しました。けれども、1～2ヶ月すると新鮮な気持ちはなくなってきて、大学は随分不親切なところだなと思うようになってきました。これはひとつには何かを与えてもらえるものだと考えていたからです。それで、その後大学はつまらない所と思って卒業したかという、決してそうではありません。

大学で得た一番の大きなことは「自由」です。それは、自分の好きに使える時間がたっぷりあり、納得できるまでいろいろ考えることができたということです。

時間が自由に使えるということは、非常にありがたいことです。大学は、今と昔では大変変わりましたが、「自由」があるという点では変わらないと思います。みなさんはこの「自由」をどんなことに使いますか。できるだけ楽に単位を取って、遊びに使うということもできますが、私はやはり勉強に使って欲しいと思っています。

それも、一生の基礎になるような勉強に。そんな勉強ってどんなものでしょう。まず、はっきりわかったと思えるまで納得するということです。それは、自分

で試行錯誤して最初に造った人の思いを自分の中に再現する(追体験)することを意味します。決してできあがった結果や知識をおぼえることではありません。また、そういう作業をする対象はなるべく古典的なもの(基礎的なもの)を選ぶべきです。早く早くと専門の勉強を急ぐ人がいますが、基礎的なことがおろそかになっている人は、納得するという状態には到達できません。

さて、こういう古典的なことを提供しようとしているのが教養科目です。もちろん、それ以外に最先端のことを入門的に紹介しようとしている科目など他のタイプのものも数多くありますが、教養科目にはたくさん種類があり、選択の幅も非常に広がっています。この中から、よくわかるまで勉強してみるものを選んで下さい。

それを選ぶとき、「教養科目シラバス」をぜひ利用して下さい。シラバスからその授業の内容がどのようなのかかなり知ることができるはずですが、また、どういう履修計画をたてればいいのかよくわからなければ、担任の先生、授業の先生、誰でもいいですから、信頼できそうな先生に相談してみてください。意外と先生の方も相談があることを期待していると思います。

私の所属している「大学教育研究開発センター」は、このような教養科目を運営維持している機関です。

1年生のみなさんは、教養科目を多くとることになりますので、このセンター内にある教養教育係には何度も関わりを持つことになるでしょう。

教養科目を有意義に利用して下さい。

キャンパス情報 —各学部から—

人文学部から

疑うところ

大学でいったい何を学ぶのか? 英語にパソコン、数学に宇宙物理、農業と環境、政治や経済 etc. etc. しか

し、もっとも大事なものはと聞かれたら、「疑う心」と私なら答える。「人を見たら泥棒と思え」というのとはやや違う。これは猜疑心であって、さしずめ外交官の心得か。方法としての疑い、「懷疑する精神(skepsis)」のことだ。懷疑こそは人類の知の発展の原動力であった。それは多くの「なぜ?」、「本当?」、「も

しも」を武器に、世の中がこうあるのは決して自明なことではなく、誰もが当たり前と知っていることの中に潜む大きな誤謬や嘘を見抜く力を備え、決して熱狂せず、洗練されたしなやかな精神のことだ。人権、平等、民主主義、ヒューマニズム、環境保護、全人教育、競争原理、国際化、そしてグローバリゼーション。本当にそれらは世に声高に言われているようなものなのだろうか、と疑ってみてほしい。「油のための戦争」と書けない大新聞を疑ってみてほしい。懐疑は受動的に教わってなぞるだけの学問からは決して生まれえない。観察と推論の積み重ねによる自力の論理を打ち立てること。ではなぜ疑うのか？それはデマゴグたちのもっともらしい言葉に惑わされないようにするためであり、タブーをつくらず、何者にも脅されず、自分の心を曲げずにまっすぐに保つためである。経済的自立は自由を保障するが（ヴォルテール）、疑うことと選択の自由を自分に保留するという精神の自由こそ尊厳ある人生への鍵である。それにしても最大の懐疑は「私は何を知っているか」（モンテーニュ）であろう。自分の判断と知の限界を知ることは寛容の精神につながる。疑うことのない寛容はないのだ。懐疑と寛容はさながら楕円の両極であり、光と影のようだ。学生諸君、「懐疑の精神」を身につけて卒業してほしい。そのための触媒として我々スタッフがいます。

（人文学部教務委員長 鄭 基成）

教育学部から プロジェクト科目について

これまでの大学教育では4年次に卒業研究を行うのが通例です。しかし、就職活動が長期化し卒業研究に十分時間をとることができないことは先輩方の体験からうすうす感じていられるでしょう。また、教える側からも、大学全入時代の到来と言われる近い将来に向けて、学生の「質」と教育方法の改善を真剣に考える必要がありました。

そのため、情報文化課程では平成11年度より、カリキュラムの重要な柱としてプロジェクト科目を導入しました。講義形式をとらないで作業を中心とし、地域社会との関わりを重視した新しい学習形式です。

プロジェクト科目は以下のような考え方で実施しています。

- ①基礎から専門へという発想をとらない。
- ②一年生からテーマを持って、班別に共同作業（学習）を行う。
- ③「つくること」「情報を整理・加工してモノとして残すこと」「フィールドワークを行うこと」の三点のいずれかを選ぶ。
- ④教員だけでなく、上級生も指導に加わる。異学年の集団を単位とする。
- ⑤成果を社会的に発信、還元する。

これらの成果は、雑誌『いんふおかるちゃあ』等にまとめて地域に公開されています。実施においては社会の様々な人々と関わるとともに、その成果物によって社会から教育成果の評価を受けることになります。目的と意義を明確にして授業に参加できるはずで

プロジェクト科目を1-3年次までの必修科目として導入した代わりに、これまで必修だった卒業研究は選択科目となりました。これまで4年次でおこなっていた専門的な研究や演習、制作などの一部は、より実践的な形で1年次からプロジェクト科目で実施されています。プロジェクト科目の導入により、3年次の終わりから就職活動が始まる現状でも、自分の専門性や適性を進路により反映させることも可能になります。場合によっては、プロジェクトの成果物が、就職活動にプラスになっている例も現われてきています。

雑誌『いんふおかるちゃあ』は、教官学生によって作られた茨城大学教育学部情報文化研究会が発行しています。図書館等に備えてありますので、どんなプロジェクトがどのように実施されているかは、それを参照して下さい。昨年度の特集では、今話題の「金砂郷大祭礼」を先取りしていました。

（教育学部 小泉 晋弥）

理学部から

理学部は、平成7年4月にそれまでの数学科、物理学科、化学科、生物学科、地球科学科の5学科を現行の数理科学科、自然機能科学科、地球生命環境科学科の3学科に改組し、旧来の数物化生地に捕らわれない

総合的な専門知識で社会の急速な変化に対応できる人材の育成を行うべく努力してきた。複合的な学科組織の利点を生かして、総合的で学際的かつ先端的科目を多数開講、教育効果を上げるために大々的なカリキュラム改革も行った。改組から8年が経過したが、教育システムとしての新学科体制の抱える問題点も目に付くようになり、よりよい体制への改革に向かう内発的な力学が理学部の中で働き始めている。

そもそも、大学の役割は、学術・文化の継承・発展と次世代の教育で、大学教育の目指す到達点は、社会の発展に資する科学的な考え方ができる人間の育成である。急速に発展する科学・技術、情報の洪水が渦巻き激しく変化する現代社会に対応し、授業や演習、実験や実習のコンテンツ、さらには教育システムをアップデートすることは確かに必要だ。が、大本の教育目標が達成されるなければならない。自然科学に関して言うならば、数学、物理、化学、生物で区分されたいずれかの専門分野で、系統的な専門知識と経験が大切で、それを前提として総合的学際的科目があるのだ。毎年、新入生の専門科目履修ガイダンスの際には、4年の間、何を自分の専門としたいかを考えて、授業を履修するようにと指導してきた。しかし、必修科目の縛りが緩い現行のカリキュラムでは、そうした指導を徹底するには限界がある。教育とは、教える側と教わる側があって成り立っているのであるが、学生諸君がよく考えて、最善の履修計画を立てて主体的に一生懸命勉強してくれることまで期待するのは無理がある。学部教育は、専門の基礎に重点を置き、それを土台にして社会に出てやってゆける、あるいは大学院に進んでさらに勉強できる能力を身につけさせることを目指すべきだというのがわたしの意見だ。

勿論、学生諸君の大学進学のための目的は、学問だけとは限らないであろう。大学には、知的なもの、文化的もの、創造的なものなら何でも受容してしまう自由な雰囲気が必要で、学生諸君の知的好奇心を満たし、文化活動、創作活動の場を提供するのも大学の役割なのだ。みなさんが充実した学生生活を送り、自信と夢を抱いて次のステップへ進めるよう、応援したいと思っている。

(理学部 藤原 高德)

工学部から

入学試験の多様化に伴ってか、学生間の学力レベルの差が増大しているようである。工学部では、工学基礎・数学ミニマム、物理ミニマムとして共通試験を平成14年度より実施し、工学基礎としての基礎知識習得の啓蒙に努めている（その結果を卒業研究着手等の条件とする学科もある。各学科の履修要項を参照）。考えてみると、入学当初の学生における学力差は、いつの時代にも多かれ少なかれ存在したように思う。不断の努力でこれを克服し、自分なりの考えを持って4年間の学生生活を駆け抜け、世に出て活躍している先輩諸君は少なくない。卒業から10年以上を経た今も忘れがたい、いわゆるユニークな学生生活を送った卒業生諸君について話してみたい。

体育会系のサークルに所属していたO君は、人間関係の形成を学生時代のメインテーマと考え、コンパ、合コンに明け暮れていた。が、成績は常にトップクラスであった。その秘訣として、体力にものをいわせ徹夜の連続で定期試験に臨んでいたという裏話が流れていた。現在、彼は東北地方の某企業工場長を勤めている。セールスエンジニアとして欧米と日本を行き来して活躍中のS君は、映画「Shall We Dance?」公開以前であったが、社交ダンス同好会に所属していた。「よくあのスタイルで・・・」と失笑する仲間も少なかつたようである。しかし、タキシードに身を包み憧れのパートナーと華麗にステップを踏む勇姿が、研究室のアルバムに今も残されている。素敵な笑顔でひとときわんでいたSさんは、卒業研究で希望の研究室へ配属されず、泣く泣く当研究室にやってきた。しかし、持ち前の明るさと頑張りで大学院進学を果たし、希望の研究分野で立派な成果を上げて巣立っていった。趣味のバンドでドラムを担当していた彼女は、現在、一児の母として、企業マンとして活躍中である。・・・等々。彼ら、彼女らがまじめ一徹な学生であったとは思えない。共通して言える素晴らしさは、事に向かったときの集中力と切り替えの上手さだと思う。真面目であったとは言い難い卒業生諸君が世に出て活躍し、茨城大学の知名度アップに貢献することが多々ある、

と認めざるを得ないと思う。

4年間は短いようで長い。将来の糧となるよう、いろいろな経験をして欲しい。周りはおもかく自分の考えを持って学生生活を送ることが最も大切であることは、先輩諸君の例からも明らかであると思う。そのような学生諸君を、全ての教職員がバックアップしてくれることを確信している。

(工学部 稲見 隆)

農学部から

新入生諸君の中には一度も農学部に来ることなく卒業する人もいるかもしれません。農学部は阿見町にあります。一年次生の暇な時にぜひ農学部を訪れてみて下さい。農学部のキャンパスは他の国立大学と比較しても遜色のない美しい庭園があり、ここでは木々の四季の変化を楽しむことができます。また、農学部キャンパスに隣接して附属農場がありますが、ここでは農業生産の四季を実感することができます。今農場では、梅の花が終わり、桜に負けじと梨の花が咲き誇ります。そして、冬作物(大麦)の収穫の準備と夏作物(水稲、サツマイモ)の植付け準備に追われています。

日本では冬にトマト、キュウリやメロンがふんだんに販売されるなどして、農産物のほとんどが周年供給されています。農作物の品種改良や「産地から消費地」までの輸送・保管技術の進歩により、農産物の旬がな

くなってしまいましたが、このことは本当に幸せなことなのでしょうか？野菜本来の季節に露地で生産された本物の味を知らない世代が増える中で、限られ石油エネルギー資源を消費して作る野菜など、「食のあり方」が今問われています。また、食べ物は本来様々な食味があるものであり、美味しいものから美味くないものまで幅広く存在します。調理や加工の仕方でのその特性が生かされるものです。農産物が画一化された美味しいものしか売れない現実から、食物の味が実は単純化し、ある特定の「品種」しか生産されなくなっていますが、このことは本当に幸せなことでしょうか？ヨーロッパでは伝統的な農産物(昔作られていた農作物や家畜の品種)に価値を見出して、生産を保護する政策がとられています。さらに、もし自分が自給自足の生活をするとしたら、どのくらいの面積にどんな作物や家畜を育てる必要があるのでしょうか？輸入飼料に依存する畜産業からの脱皮や食糧の自給率を高めるためには何が必要なのでしょう？24ヘクタールの広大な農学部附属農場を散策する中で答えを見出して下さい。

農学部2年次生には授業科目として農場一般実習などがあり、いろいろ体験できるので、ほとんどの学生が受講しています。日本の「食のあり方」を考えるよい機会になると思います。

(農学部教務委員 佐合 隆一)

Voice - 教養科目を面白く聴く工夫 -

大輪 恵美 (人文学部2年)

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。みなさんは、これから始まる大学生活に対して、期待と不安の気持ちでいっぱいなことでしょう。

大学の授業は、大きく「教養科目」と「専門科目」に分かれています。1年生の間は、教養科目中心の授業になります。教養科目は、「共通基礎科目」と「主題別科目」から構成されています。共通基礎科目は、外国語や情報関連科目などで構成され、現代の国際化・情報化社会に対応した能力を育成していきます。外国

語の中で、第2外国語として中国語や独語、仏語、朝鮮語など、今まで学習したことのない言語を学ぶことができます。主題別科目は、人文・社会・自然といった分野別科目や総合科目、主題別ゼミナールで構成され、自分の専門とは違った幅広い内容を学部問わず学ぶことができます。

教養科目を面白く聴くには、まず、自分にとって本当に学びがいのあるものは、何かということを探ることが大切です。このことは、自分さがしであるといつてよいでしょう。自分がこれから知りたいと思うことや、自分が面白い、楽しい、得るものがあると感

じるものは何かなどを自分でじっくり考えて、興味・関心を広げていくことで授業を面白く聴くことができると思います。

自分の専門とは別の分野である教養科目に視野を向けることはとても大切です。ここで学んだことは、これから先に大いに役立つことになるでしょう。あらゆる学問はつながっているものです。そのことを忘れないで下さい。様々なものの考え方を知ろうとする意欲を持って、講義を受けることが大切です。この意欲こそが、授業をより面白くさせ、大学生活を充実させることになるでしょう。

最後に、これから自分で授業を選び、受けていく新入生の皆さんは、シラバスをじっくりと読むことを絶対してください。シラバスとは、「授業計画書」のことです。授業の進み方やねらいなどが書かれています。このシラバスこそが、授業内容の重要な情報源になります。シラバスを読んで、自分が学びたい授業を考えて下さい。また、先輩に話を聞くことも大切であると思います。大学生活の中において、学問以外にも様々なことを得ることとなるでしょう。これからの大学生活が充実したものとなるかどうかはあなた次第だと思います。充実した大学生活を送ることができるよう頑張ってください。

石田 憲之 (工学部2年)

大学へ入り一年生で受ける授業は、ほとんどが教養科目です。大学の授業は専門分野ばかりで、きれいな国語や社会をやらなくて良いと思っていた自分にとっては、がっかりでした。

自分の興味のない授業の中から選ばなければならない時、非常に困りますし、興味のあるものがあっても、抽選で落とされる可能性もあります。

こんな感じではじめのうちは、あまり面白くありませんでした。

でも、今思えば教養科目は良かったと思います。専門科目を勉強してみて、いろいろな分野の知識が必要であると感じるようになりました。ものを作るにしても、機械工学の知識だけでは良いものは出来ないので、一年生のうちは気づかなくても、二年生になって専門科目を勉強するようになれば、だれでも教養

の必要性を感じると思います。二年生になってからでは専門科目ばかりになってしまうので、一年生のうちに教養科目をたくさんとって、いろいろな分野の話を聴いておきましょう。環境の話はとても面白かったですよ。

教養科目は、専門科目のように必死に頭にたたきこむということではなくて良いと思います。授業に毎回出席して、きちんと先生の話をお聞き、だいたいこんな感じぐらいの理解で良いと思います。

それから、工学部の学生に関して、教養科目で数学と物理学がありますが、これらをおろそかにしてしまうと後々苦労することになるので、しっかり勉強しておきましょう。教養科目というよりむしろ専門科目として取り扱った方が良いです。毎日少しずつやれば、きれいになることはないと思います。それと、英語もしっかりやっておきましょう。

教養科目は興味がないものが多いかもしれませんが、自分の専門分野以外のことを学ぶことは必要だと思います。それから繰り返になりますが、二年生になるとほとんど教養科目がとれなくなります。一年生のうちに、自分の専門分野と全く違った授業を受けるのも良いのではないのでしょうか。

高瀬 雅幸 (農学部2年)

講義を受ける前にはシラバスをしっかりと読んで、興味のある講義を選ぶ。興味のない科目の場合は単位のとりやすそうな講義を選ぶ。講義を受ける際は、休まない。質問をする。私はこれらを心掛けていました。

私は学生が工夫する以外にも教官が教養科目を面白くすることは、教養科目を面白く聴くことにつながると考えましたので、教官に是非やって欲しいと思うことを述べたいと思います。まず教官がやる気を出すことが重要だと思います。やる気の感じられない教官の講義では学生もやる気が出ないと思います。今年の講義中に教室の後ろでおしゃべりしている学生がいても注意する教官は少なかったです。もしもやる気があるのなら学生のそのような態度は我慢できないと思います。それにそのような学生がいるとまじめに講義を受けている学生までやる気をなくしてしまうという悪循環に陥ってしまうと思います。次に教え方ですが、教

官毎に教え方も異なり、講義毎に難度も学んで欲しい点も異なると思うので一括りにして言うのは難しいと思います。ただ、どんな講義でも興味を持ってもらう事と、質問しやすい雰囲気を作るように心掛けて欲しいと思います。興味を持てば質問します。質問すれば理解度が高くなり講義が面白くなっていくと思います。

大学側にも工夫が必要だと思います。講義の専門家による教官の指導の場を設けるなど、積極的に講義の質を上げる努力をして欲しいと思います。又、せっかく教官が講義の質を上げてても学生が的確に講義を選べなければ意味がありません。ですからもっとシラバスの内容を充実させて欲しいです。私が講義を選ぶ際、最も欲しかった情報は実際に講義を受けた学生の意見だったのですがシラバスにはそれが記載されていませ

ん。学期末に授業アンケートを集めているのですからその結果や意見をシラバスに記載してはどうでしょうか。又、やる気を出し、様々な工夫をしている教官も確実にいます。そのような教官を評価する事も重要な事だと思います。評価の高い教官に研究資金を授与している国立大学もあると聞いたことがあるので、それを取り入れるのはどうでしょうか。これは無理かもしれませんが、とにかく何らかの形で大学が教官のやる気を引き出していないといけないと思います。

これまで述べた事は私が思っているだけで実際は間違っていたり、実施されているかもしれません。ただ、学生だけで出来る工夫は限られていると思います。ですから学生と教官と大学の二人三脚ならぬ三人四脚で講義を面白くする工夫をしていくべきだと思います。

聞いて欲しい私の意見 -こんな教養科目があったなら-

中野 冬咲子 (人文学部 1年)

たかが教養科目、されど教養科目。私がこの1年間を通して教養の授業に感じたことを一言で表すとこんな感じになるでしょう。1年次の授業の大半は教養科目で占められます。ですから授業が自分にとって面白いもの、意味のあるものになるかどうかは、大学生生活初めの1年間にとってなかなか重要なことです。

私は自分が本当にやりたいことを見つけるために大学に進学しました。本当は海外の大学に進学したいと考えていましたが、これといってはっきりとした目標分野があった訳でもなく、日本でしっかり何かを学んでからにしようと思い、今に至っています。現在、ある程度自分のやりたいことの方向性は定まっていますが、もっと様々な分野に触れ、自分の興味を広げていければ、と考えています。そんな私にとって、様々な分野がある教養科目はひとつのチャンスだと思いました。そして、この1年間受けてきた感想はというと、これだ！と感じたのと、正直少し拍子抜けしてしまった、というのと両方です。

二・三百人も入る大教室での一方的になりがちな講義。人が多いと何となく質問がしにくいと感じるのは私だけでしょうか。また、内容がいきなり専門的過ぎ

て、何について話しているのかさえさっぱり分からない授業もありました。高校でその科目を取っていたにもかかわらず、全くついていけませんでした。特に、高校でその科目を履修していなかった知人には辛かったようです。私がとった授業の中で、途中で興味もなくなり、最終的にはただ単位を取るだけのための授業になってしまったものもいくつかありました。これではせっかく授業に出ていても意味がありません。しかしそれは、もっとその内容に対して深く知ろうと努力しなかった自分にも責任はもちろんあります。

大学生生活の4年間で何をもらえるか。授業を自分にとってプラスのものにできるかどうかは、私達学生次第かもしれません。しかしそれに加え、普段聞けない話が聞けたり、体験できる、そんな授業がもっと増えれば、というのがこの1年間で感じた私の願いです。2年次でも、教養科目の授業をいくつか受けますが、その中でさらに自分の視野を広げ、様々なことを吸収していければと思います。

早川 優佳 (教育学部 1年)

「バイトや遊びは大学に入ってからにしろ！」

「自分の好きな分野だけ勉強するのは、大学に行っからいくらでもできる。今は弱点克服だ！！」

……『受験生』時代の私（だけじゃないはず！）が、何度となく耳にしたセリフである。そんな言葉に後押しされ（？）て、茨大合格を手に入れた私（達）の手に、『シラバス』が届く。

「こんなに沢山の授業の中から、好きなものを選んでなんて、ほんとに『大学』って感じ！遊びも、勉強も、好きなことをとにかく全部やろう!!」

私の新生活への期待はめいっぱい膨らんだ。

四月。初めての一人暮らしと共に、私の大学生活がスタートした。授業は勿論、サークル活動、バイト探しなど、自分がやりたいと思ったこと全てに手を出した。毎日が楽しくて、多忙な日々を送っていた。……けれど、なぜか有り余る一人の自由な時間。(今思うと、自分を見つめ直すよい機会だった) その中で、将来に向けて漠然とした不安を持ち始めるようになった。「自分は本当は何をしたいのか。」「このままの生活を続けていて、夢に近づいて行けるのか。」そんなことを考える日々が続いた。

一年次も終了に近づいた現在では、友達に相談したり、少しでも自分の目指す職業の情報を集め、行動を起こしてみることで、「自分は前に進んでいる」と信じることができるようになった。しかし、いつ再び立ち止まってしまうか分からない。悩みなさ気に笑っていても、そんな不安定な思いを抱いている学生は、私だけではないと思う。

そこで、私が提案したい教養科目は、『教授の学生時代の話を書く』というものだ。

私は、ある教授が学生時代、『詩集』を出したいという気持ちを押しさえ切れず、とうとう自分で詩集を作って、売ったことがあるという話を聞いて驚いた。そして、自分の夢に向かって動き出せる力を、私ももう持っているんじゃないかな？と希望を持つことができた。人生経験豊富な教授のお話は、「やりたいことが見つからない。」「今、何をしたいのか分からない。」という学生の参考になるのではないか。

さて、そこで私は、シラバスを作ってみた。
[総合科目：人間文化科目系？] 『我々の学生時代』
ねらい：大学生活の中で与えられた自由な時間に、自己を見つめ直す学生がいる。教授が自分の学生時代を学生に語ることで、助言を与えたり、親近感を持たせ

る。後に悩みを抱えた時、相談できる関係を作る。

概要：毎回違う学部・学科の教授のお話を聞く。なぜ、専門とする分野に興味を持ったのか、自分はどんな学生だったか。学生に伝えたいこと等を語って頂く。学生はそれらを参考にし、様々な分野への興味・関心を深め、学生生活を豊かにしていけるよう努める。

……以上です。失礼しました。m (_ _) m

後藤 真希 (理学部1年)

貴方は小学生くらいのころ、野外学習で校外に出るのが楽しくありませんでしたか？同じ内容を勉強するのでも、机の上で教科書とノートを広げるよりも、直に目で見、手で触れて学んだことの方が何故か印象に残った覚えはありませんか？そうした『実践で手にいれた知識』というのは、なかなか忘れられないものです。

そして、現実に役立つ技術というのは、この知識に基づくものが殆どです。例えばマニュアルを読んだだけでは、大抵の人はその通りに動くことはできません。やり方を知っているのと実際にそれを出来るかということ、次元が全く異なってくるのです。しかしその知識も技術も、独学で手にいれるのはかなり難しいものがあります。もし今私が誰かから突然ツルハシとハンマーとマニュアルを渡されて『どこそこの崖からこれこれを採掘して、その成分を研究して来なさい。方法はそこに書いてあるから』と言われても、例えばそれがどんなに興味深い課題であっても、多分途方に暮れるしか無いでしょう。何しろ私は穴掘りの方法すらまだ知らないのですから。

もちろんその専門分野に進めば、そうした学習を授業として受けられます。むしろそうした授業こそが日常の学習となることもあるでしょう。特にその分野を極めようとする人達（例えば研究職に就く人など）にとってはなおさらのことです。

しかし、例えば自分の専攻科目を見つけてしまった人達でも、それ以外の何かに興味をそそられるということも良くあることです。例えば理学部で学んでいる人も、ただ化学や生物に対する学習だけに食指を動かされるという訳ではありません。どんなにそうしたことを学ぶ事が好きな人でも、歴史や文学といった文系の科目

に興味を持つこともあるでしょう、またその逆ももちろん有り得る事です。それほど人の好奇心という物は、限りの無い代物です。私にとって大学の教養科目とは、そうした好奇心-新しいことを知りたいという欲を満たすにはもってこいでした。

だからこそ、その教養科目にこうしたフィールドワークを教える授業があってほしいのです。現実には、不

思議なこと、解らないこと、知りたいと思ったことを理解しようとするに全力を注げるのは、研究職にでも就かない限りは学生の間だけだと思います。その貴重な時間の間に『実践で手にいれた知識』、『自力で出来るだけの技術』を手に入れることが出来れば、それだけでも学生生活は無駄なものではなくなるのではないのでしょうか。

教 養 教 育 古 今 東 西

大 島 一 芳 (人文学部)

外国語教育の在り方が、かまびすしい議論になるのは何も今に始まったことではないようです。30数年前の高度成長への突入期であれ、デフレにあえぐ現代であれ、社会の変革期に恒例行事のように登場するのが、外国語教育、特に英語教育問題です。想像するに、社会の諸制度の効率性が問題になると、いい意味でも悪い意味でも、それが教育の分野に反映され、そして凝縮された形でそれを一身に背負うのが英語教育ということになるのかもしれませんが。(英語教育の専門家には是非この点を検証していただけたら有り難いと思っ

ている次第。)

私が大学に入学したのは、昭和42年です。当時の大学の教養英語は「読み、書き」が中心でした。外国人教師を大勢雇っている昨今の状況を見るにつけ、隔世の感がします。主に英米の文学作品や随筆を中心とした購読の授業がすべてでした。授業は訳読を中心としたものでしたが、文章や段落の構造、論旨の展開など日本語についても多くの示唆を与えられました。つまり英語の授業から日本語も同時に学習していたこととなります。(昨今問題となっている国語の学力の低下はひょっとすると外国語の訳読式の授業の軽視にその原因の一端があるのかもしれませんが?ただし単なる憶測。)

そのような背景があって、私が20年前に茨城大学に赴任し、教養英語を一本担当することになった時、迷うことなく Herman Melville の Benito Cereno という文学作品を教科書として指定しました。こちらはそれで当然と思っていますから、選定したテキストの適否に関していささかの疑念も抱きません。しかし何年

後かに、教え子の結婚式に出席したその席上で、ある卒業生から「大学の4年間で一番難解で苦勞した授業は教養の英語、Melville であった」ことを知らされ、愕然とした次第です。当時の学生は、良く我慢をして、私のわがままを許してくれたものだと思います。また学生も単位を取るために、良く勉強したと思います。おそらく現在のようない授業アンケートがあれば、最も不適格な外国語の授業として即刻改善命令を出されるか、あるいは授業登録をする学生は誰一人としていないかのいずれかでしょう。私にとっては、古き良き時代の一コマとして印象に残っている出来事です。

さて教養英語教育ですが、どのようにカリキュラムを変えようが、学生の英語の力はあまり変化しないでしょう。制度をいじっても制度以前の学生自身の学習動機が変化しないことには多くは期待できない、と言ったら言い過ぎでしょうか。英語を使わなければならないという切迫感があって初めて、英語はものになる訳です。その切迫感を感じた者だけが努力をすればいいのです。従来「教養としての外国語」は比較的受け身の態度でも修得でき、多人数でも授業展開が可能であるというコスト面での利点がありました。しかし「発話行為を伴う英語」は、少人数による授業展開が必要であり、しかも効果を上げるためには学生の能動的な参加が求められます。したがって学生の学習動機がおのずと決定的な要因となります。本学の英語教育改革に水を差すつもりは全くありませんが、コストに見合った効率性という観点からすると悲観的にならざるをえません。今となつては、改革の結果、今以上に学力の低下を招いたとか、金をかけた割には云々等の声が上がらないことだけをただひたすら願うのみです。

掲 示 板 コ ー ナ ー

電子掲示板の利用について

共通教育棟において、電子掲示板により、休講・教室の変更・集中講義及び大学の行事等を掲示されておりますが当分の間、学生の呼び出しや試験等については従来どおりの掲示板によりお知らせしますので注意して下さい。

掲示板を見ないことにより、所定の期日までに手続

きなどができず、不利な取り扱いを受けることもあります。

登校、下校、授業の合間には従来の掲示板と電子掲示板の両方の掲示に注意して下さい。

— 毎日3回は見ましょう —

つ ぶ や き

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

大学は高校と違って、教師が皆さんを画一的かつ管理的に教育しようとすることはありませんので、科目選択から授業への出席に至るまで皆さんの自主性にゆだねられています。4年後に卒業するためには決められた最低限の単位を取得すれば良いわけですから、自由時間が多くなると思います。

大学の自由な雰囲気にあこがれて入学してきた学生も多いと思いますが、学年が進むにつれて、その自由を持て余しがちになる学生も多く見受けられます。何をしたら良いのかわからない、やりたいことが見つからない、同級生とまじめな話をすると嫌われそうなので誰に相談したらいいかわからない、授業がつまらない、ゼミの学生からしばしば聞かされ

ます。多くはコンパの席上ですが。

そうならないためには、知的好奇心を持ち続けることが最も大切ですが、大学の外に飛び出して、地域の人々と交流することも大切だと思います。地域社会には様々な問題を抱えながらも希望や夢を持って活動している人々がたくさんいます。

大学で勉強する大切な意義の一つは、地域社会の「普通」の人々が抱えている希望や夢の実現を支援することでもあります。地域社会から学生の意見を聞きたいという要望が数多く寄せられています。是非、大学内に閉じこもらないで、勇気をもって地域社会に一步踏み出して、地域の人々と交流して下さい。必ず、歓迎されることと思います。

(斎藤 義則)

発行日 平成15年4月
発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター
水戸市文京2-1-1
029(228)8415(学生課教養教育係)